

京都文教大学人間学研究所公開講演会 「アフリカ都市研究 ことはじめ」

開催日：2004年 1 月16日

講演者：米山 俊直¹⁾

日野 舜也²⁾

司会：平岡 聡³⁾

平岡聡（司会）：大変長らくお待たせしました。それではただ今から京都文教大学人間学研究所主催、日本民族学会近畿地区研究懇談会共催で公開講演会を「アフリカ都市研究 ことはじめ—1960年代に始まったアフリカ都市研究の40年を顧みる」と題して行いたいと思います。本日司会を務めさせていただきますのは、人間学研究所副所長を務めております平岡でございます。よろしくお願いします。専門は仏教学で、文化人類学とはまったく関係ありません。従いまして両先生のご紹介、進行の途中で的是はずれなことを申すかもしれませんが、その点ご了承くださいたいと思います。それでは両先生を改めてご紹介させていただきます。

皆様のほうから向かって左にお座りなのが、大手前大学学長の米山俊直先生でございます。先生は1930年にお生まれになりました。京都大学大学院博士課程を修了されたのち、甲南大学助教授を経て、京都大学教授をお務めになられ、京都大学で農学博士の学位を取得されております。1994年に京都大学名誉教授になられ、放送大学教授や日本学術会議会員等を経て、1997年より現職の大手前大学学長を務めておられます。文化人類学がご専門で、アフリカ都市研究から京都の祇園祭をはじめとする日本の祭にいたるまで、幅広いフィールドをお持ちでいらっしゃいます。著書といたしましては日本放送協会から出ている『アフリカへの招待』、世界思想社から出ております『私の

比較文明論』、中央公論新社から出ております『祇園祭—都市人類学ことはじめ』等、共著を合せて34冊の著書、論文多数を發表されております。それから昨年秋に立ち上げられました国際京都学協会の理事長も現在務めておられまして、京都研究、京都学にも精力的に取り組んでいらっしゃいます。

引き続きまして皆さんの右手にお座りの、京都文教大学教授かつ人間学研究所所長をされております日野舜也先生のご紹介をさせていただきます。先生は1933年のお生まれで、北海道大学大学院博士課程を単位取得満期退学され、北海道大学で文学修士を取得されました。のちに東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所教授を経て、1996年京都文教大学が創設されました年に本学教授として着任されました。この間、東京大学、筑波大学など多数の大学で非常勤講師を務めていらっしゃいます。それから2000年より、ベフ・ハルミ先生のあとを受けまして人間学研究所の所長に就任されました。専門は都市人類学で、アフリカを都市という視点からフィールドワークされ、日本におけるアフリカ都市研究のパイオニア的存在でいらっしゃいます。1964年からの2年間、京都大学アフリカ類人猿学術調査隊の隊員としてタンザニアで調査にあたられたり、1969年からは東京外国語大学アジア・アフリカ文化言語研究所におけるアフリカ部族社会の比較調査のためにカメルーン、ナイジェリア、エチオピア等にご

1) 大手前大学学長：当時

2) 京都文教大学人間学部文化人類学科：当時

3) 京都文教大学人間学部臨床心理学科 教授

調査におでかけで、その後もアフリカで調査に向いていらっしゃいます。著書といたしましては、世界思想社から出ました『アフリカの都市社会』、あるいは朝倉書店から出ました『図説世界文化地理大百科・アフリカ』（監訳）など多数の著書、論文を御発表でいらっしゃいます。

以上が本日の講演者両先生のご紹介で、このあと少し時間をいただき、若干スケジュールの簡単な説明をさせていただきます。時間は2時間です。まず日野先生にプレゼンテーションをしていただき、引き続いて米山先生にプレゼンテーションを20分、それを踏まえてお二人の先生の対談を1時間、それから質疑応答で20分、という予定で先ほど打ち合わせをしましたら、もうすでにこのスケジュールがくずれそうな雰囲気もございます（笑い）。核になりますのは対談、対話ということになるかと思えます。基本的には米山先生に聞き手になっていただき、日野先生にお答えいただくという形を取るようになっておりますが、その道40年以上の大家でいらっしゃいます両先生のセッションでありますから、ジャズのインプロヴィゼーション、即興演奏のように、いい意味で流れにまかせて脱線するかもしれません。もう最初から脱線の様相を呈しておりますけれども、対談の面白さというのは、いい意味での脱線にあらうかと思えますので、その辺も私自身どんなお話が伺えるのか非常に楽しみにしております。それでは、後はもう両先生に進行をお任せするとして、「アフリカ都市研究 ことはじめ」と題して公開講演会を始めさせていただきます。よろしくお祈いします。

日野舜也：皆さんこんばんは。今日は寒い中を大勢お集まりいただき、有難うございます。まず最初に私も米山さんもそれぞれどんな形でアフリカに携わったのかということをお話できればと思います。米山先生は私よりも1年前にアフリカへ第一歩を記されまして、私よりは先輩ということになります。ただ、アフリカの都市研究となると私のほうがちょっと早いかなあ、という感じですが、まあ、そういうことは別として米山さんと私は日本の都市の研究といった所でも一緒に加

わっていますし、もちろん私が米山さんを先生と呼ばなくてはならないのですけれども、私としては先輩であると同時にかけがえのないアフリカ仲間と思っておりますので、そんな形で話がいつてしまうかもしれません。失礼の段は、平にご容赦ください。

私はさきほど紹介にありましたように北海道大学の文学部の、その頃は哲学科という恐ろしい名前が付いていましたが、哲学科の社会学を卒業しました。だけど実は私は最初から社会学にいったわけではなくて、最初はお医者さんになるはずで、ちゃんと医進コースに入ったんです。けれども、北大に入りましたら勉強より面白い、映画っていうものがあることが分かりまして、それ以来学校へ行くよりは、札幌の駅に降りますと、北のほうの北大に向わずに、南のほうの盛り場の映画館に向うというような生活を続けまして、もちろん医者になれません。

そこで、なんとか映画を活かせることがないかなということで模索していましたが、その時に鈴木榮太郎先生という社会学の大家がおられまして、この先生は来たるものは拒まず、何人来ようと全部私が引き受けるという、そういう基本的態度でおられましたので、当然私はその門を叩きまして、鈴木先生の社会学の警咳に接することになるのです。で、鈴木先生がちょうど『日本都市社会学原理』という本を書かれているフィールド調査の時でしたので、私はそのフィールド調査を2年半くらい、ほんとにいろんな形で手伝わさせていただきました。だけど、例えばお風呂屋の前に行って、どこから客が来てるか調べろ、とかそんな話ですので、その時にはそんなものが、本になるようなことなのか分かりませんでした。しかしそのうちにざっと授業を聞きながら、先生のすごい、壮大な考え方を知ったわけです。

そうしたうえで、私にはもう一人、富川盛道先生という私の人生の師がいます。この先生は北海道でアイヌの研究をされておられまして、ある時私が富川先生の部屋に行ったら、「おい日野君、来週アイヌの調査に行くんだけど一緒に行くかい」と言ってくださったのが、私のある意味での異文化にぶつかる最初の体験です。そんな

ことで、鈴木先生、それから富川先生の薫陶の下で私は卒論で映画について書きましたけれど、その後は北海道の都市社会、開拓社会のフィールドワークをずっと続けてきました。特に北海道に新しく出来ましたパイロットファームという計画的な開発社会が、どうやって日本中から集まった人たちの文化をひとつのものに作り上げていくのかなど、そんなことをずっと研究させてもらいました。

その時は、私はまだ自分自身がアフリカに出るなんて考えても見なかったのですが、ある時富川先生が私に「おい日野君、君は北海道の都市をやるんだろう」とおっしゃるので、「はい」と答えましたら、それだったら北海道の都市は大体、まず日本の植民地ですから、植民地社会の都市なんだよ、と。かつ19世紀の末ぐらいに出来始めた都市ですから、そうすると、アフリカの都市もよく似てるじゃないかという。それでイギリスにはマンチェスターというところのグループが数年くらい前からアフリカの都市の研究を始めているよ、と。それで、そういう都市の本を少し読んでごらんと言われまして、最初に私が目を通したのが、今は翻訳も出ていますがホレース・マイナーという人の『プリミティブ・シティ・オブ・トゥングクツ』という西アフリカのマリノの非常に古い12、3世紀からの都市である、トゥングクツという町を調べたものです。

これを読んで、それまで私が社会学でもっていた常識がいろいろ壊されます。例えば、社会学には統計調査があるわけですけども、そこで彼は人口を計算するのにどうしたかという、航空写真を撮りまして、そしてその戸数を数えて、それから下のほうの調査で大体一軒あたり何人くらい人がいるかというのを幾つか調べまして、それを掛けるという、そういうすごい恐ろしい調査法から始まっている。私はその時まだ社会学徒ですから、こういうことできんのかいな、なんて思っていました。それでその頃はまだ終戦直後で日本は経済的にだめな時ですから、自分自身がアフリカに行けるなんて思ってなかったんですけども、そのマイナーを始めサウゾールとかその他のアフリカの炭鉱研究とか鉱山都市の研究とかを読み始

めていました。

そうしたら1961年、京都大学の今西錦司先生を中心にしたアフリカ学術調査隊が結成されまして、その第1回のメンバーの中に私の先生である富川盛道先生と、私の仲間である富田浩造君という2人を連れて行くということになりました。で、彼らは結局アフリカに3年間留まって、フィールドワークをやったんですが、そのうちに帰ってきました、アフリカの都市研究をやるのを一人くらい連れていってもいいんじゃないかということになったようです。この辺は米山先生にお話をお聞きしたいと僕も思っていることなんですが、それで私は早速京都に呼ばれまして、京都で今西先生の面接を受けます。見事に落とされます。こんな弱々しいやつを、今でこそ図太い顔をしておりますが、その頃はかわいい…かわいくはないけれど、青白い青年でしたけれども、そこで富川先生は「そんなことはない、あれは結構芯が強く…」ということを書いてくださいます、その結果として私が選ばれました。

そして米山先生が行かれた次の年、1964年に私はアフリカに行きまして、それで私の場合は行く場所が大体決まっておりました。それはタンザニアという国の一番西の端、タンガニーカ湖という湖があるそばのウジジという小さな町です。人口が2万足らずの町です。ここを何故私のフィールドに京都大学が選んだかといいますと、これはきわめて物理的な理由です。このウジジの先の山の中で、チンパンジーを研究する人たちがフィールドワークをやっていたので、そのチンパンジーの人たちに何か起こった時の連絡役でお前はこの都市にいろ、ということだったのです。いずれにしても私はこの町に2年間ほっとかれます。まあ、途中でお金だけ送ってきましたけれども、そうすると、1年くらい経つと、私は一生懸命スワヒリ語を習っていたんですけども、だんだん恐ろしい夢を見るようになります。何もしないで日本に帰ってですね、一体明日からどうしようかといったようなものです。

そのうちにスワヒリ語が出来るようになりまして、言葉を覚えるところから始まったんですが、ウジジで2年間放っておかれて、なんとか、私な

りにはウジジの調査をし終えたということになります。で、2年経って日本に帰ってきたわけですね。すると富川先生が空港に迎えに来てまして、そして、お前は家帰っちゃだめだって言うんですね。お前はどうぞせろくなフィールドノートもちゃんと書いていないんだろうし、頭ん中に全部データぶちこんできてるんだろうから、それを吐き出してからでないと親に合わせないって言うわけです。それで私は富川先生の家に住候しまして、2ヶ月間そこで、私の頭の中に入っているものを全部吐き出して、いくつかの論文を書きました。結果的にそのときの蓄積で書かれた論文は12、3本あると思います。

それで次の年、1967年に富川さんが先に入りました、東京外国語大学のアジア・アフリカ言語文化研究所というところで、アフリカ部門が作られるということで、その応募がありました。その中から3人選ばれて入って、それからずっとアフリカの都市研究を続けたということになります。最初のところはこのくらいまでで、出来ましたら米山さんには京都大学のアフリカ調査隊のことを少しお話していただければと思います。よろしくお願いします。

米山俊直：はい。ちょっと訂正をしておきたいところが1つございます。それは、私がアフリカに先に行ったというふうにお考えになっていますが、逆なんです。私が実際に行きましたのは、66年隊なんですよ。

日野：63年に行っていないんですか？

米山：63年は行っていません。

日野：ああ、そうですか。失礼いたしました。

米山：1963年にたまたまですね、大学院の学生だったんですが、就職が決まりそうになっておりまして、そっちのほう为先だからだめだって言われまして、べそをかいて、結局降りたんですよ。それでその時に、福井勝義君が今西さんの眼鏡にかなって電報で呼び寄せて、米山行けなくなった

から、お前行け、ということになって。

日野：あ、そうなんですか。

米山：そういう経緯があるんですね。ですから、それが確か61年隊につづく、63年隊……

日野：63年隊ですね、だから、梅棹（忠夫）さんと藤岡（喜愛）さんとか……

米山：そう、その時私も行くつもりでいたんですけども、結局その時の指導教官がですね、意地悪したのではないでしょう、就職を優先させた方がいいと思ったんだと思いますね。それで結局アフリカ行きは泣く泣くやめました。66年になりますと、今度はすでに、京大の助手を辞めて、甲南の助教授になっていますから、助教授1年勤めた後行ってもいいよってことで、大きな顔をして行ったんです。

日野：そうですか。失礼しました。

米山：私の個人的な経緯でいきますとそういうことになります。ちょっと先に訂正をしましたけれども、私自身は1966年、「66年隊」って言っていましたね。和崎（洋一）さんがあの“何年隊”っていうのが好きでしてね。

日野：本人が確か呼んでいた。

米山：そういうことで、66年隊っていうのでアフリカに行きました。まずすこし個人的なことを申しあげましょう。で、最初に鈴木先生のお話をなさいましたけれども、その鈴木榮太郎さんという人については、私は学部学生の頃から非常に興味を持っていたんです。それは『都市社会学原理』でなくて、その前の『農村社会学原理』っていうすごい本がありましてね、でかい本があるわけですが、それにある意味で私は打ち取られたっていうか、立派な先生だと思った。こっちの元気がよければ先生に弟子入りすればよかったんですけども、そこまでは元気がなくて。学部は三重大学

農学部農学科ですが、専攻で何をやろうかって迷ったんです。ひとつは、植物医師になろうかと。植物病学というのがありますが、そういうのをやろうかなと思いました。もうひとつは社会、歴史、文化という農村の問題をやりたいと、農村史あるいは農村社会学といったことを考えておりました。そうやって揺れていたんですね。で、最後にエイ、と決定したのが農村社会学なんです。農村社会学をやりましたので、非常に、鈴木先生には間接的に、学恩を受けているということがあるわけですね。そういう意味では非常に懐かしいお名前を聞いたという感じがしております。それからもう一つは、あのホレス・マイナーの『未開都市トンプクツ』（弘文堂）はあれですね、赤阪（賢）君が翻訳している。

日野：はい。

米山：弘文堂の翻訳シリーズの企画を大林太良・綾部恒雄両氏としたのですが、あれを彼がやりますって言うてくれたんで、非常によかったんですけども。要するにプリミティブシティという変な呼び方ですけども、そういうことを実際にやり始めた人もいるという風なところが、まあ、背景にあるわけですね。

私自身はですね、大学院に入ったときはアフリカも知らなければですね、文化人類学、社会人類学という、要するに人類学っていうのがあるっていうことを全然知らなかったんですよ（笑い）。ほんとに言うて。で、農村社会学、あるいは農村史というようなことをやろうと思って、ずっとそれできていたもんですから。

ですが、修士の2回生の時にですね、今西先生のところに来いって言われて、行きましたらですね、アメリカからコロンビア大学の大学院の学生が農村調査をやろうと思って来ているんだが、アシスタントを探しているんだけどお前やらないかって言うんですよ。アルバイトを探していましたからね、飛びついたわけです。それで僕は、修士の2回生、丸々一年、もう少し正確に言うと、1回生の9月から翌年の9月まで手伝ったわけですね。それで、向こうは日本語がほとんど出来な

い状態ですし、こちらは英語がほとんど出来ない状態ですから、ジェスチャーでやってみたい話なんですけど、それを1年やっていますね。

おかげでですね、非常に有難かったのは、アンソロポロジーという言葉を知ったわけです。カルチュラルアンソロポロジーというのがありますよ、とね。それでね、私にとってびっくりするのは当たり前なんですけど、私は頭の中で日本の農村のことばかり考えていたんですね。ところが他にも農村があるよと、世界には様々なベザントリーがあるんだということを聞かされてですね。そこでもう目が開かれたって言うか、目からうろこが落ちた、ということになったわけですね。それで幸いなことに、その人はグリーンハウスっていうんですが、グリーンハウスがですね、いろんなジャーゴン、述語を教えてくれるわけです。例えば、パーティシパント・オブザベーション（参与観察）とかですね、そんな言葉は全然知らないわけです。だけど彼らはそういうことを、そういう風に言うんだってことを教えてくれるんで、英語が上手になる前に、述語を覚えたりしたわけです。

そして、ジュリアン・スチュワードという先生が日本にきたんですね。たまたま彼はコロンビア大学を辞めてイリノイ大学に移って、移った後半年間、京都アメリカ研究セミナーっていう、一種のジョイントベンチャーなんですけど、京都大学と同志社大学が共催してですね、楽友会館にオフィスがあって、そこに常駐する先生がいて、というのをやっていて、そのディレクターに応募して来日されたわけですよ。たまたまですね、その時にイリノイ大学に移ったからというんで、フォード財団が25万ドル、ボンと研究費を出した。世界全体のいろいろな所で起こっている文化の変化を比較研究するっていう、大プロジェクトなんです。それでそのお金を貰ったんで、彼も舞い上がったんだと思うんですけど、日本からも人を呼ぼうっていうことになります。それでその時にですね、岩村忍先生などが紹介して下さったので有難かったのですが、スチュワードに会っておけって言われて、会いに行きまして、そしてインタビューをしたわけですね。まだ英語も片言です

けれども、パーティシパント・オブザベーションとか知っているわけですね。それが強かった（笑い）。それでね、よし、こいつを使ってやろうというわけなんですね。それがひとつのきっかけでアメリカに行ったわけです。

イリノイに行きまして、ちょうど1年、要するにどんな講義でもみんな聴けばいいというので、とにかくオーディット（聴講）ばかりしてですね、グレードの100台の入門から500台の難しいゼミまで、全部付き合うような形で、乱暴な話なんですからそういうことをやりました。実際に大学院の学生として登録しますと、私の身分というのはフルタイムアシスタントなんで、1学期に1単位しか取れないんですね。もういいやというわけで、それは取らないで、オーディットさせて下さいと言って、聴講生でですね、いろんな講義を聞いたわけです。

その時にですね、チャキチャキのアフリカ帰りの学者がいたわけですね。エドワード・ウインターという人なんです。エドワード・ウインター先生の講義が、100台の初歩のイントロダクション・オブ・アンソロポロジーから、5、6人の学生を相手にして本を読む500台くらいの難しいセミナーまで、いろんなのがあって、それを全部付き合ったんです。それでアフリカっていう研究対象があるっていうんで、すっかりアフリカにいかれちゃってですね、日本なんかどうでもいいっていうことにだんだんなりまして（笑い）、それでアフリカいいな、いいなと思いつつながら日本に帰ってきましたら、たまたま今西さんが類人猿学術調査隊を組織して出かけていた、という段階だったわけですね。そのあたりから、アフリカとの関わりが始まったということなんです。

それから後は、いろんな経緯がありますがけれども、今西さんが留守にしている時にですね、アフリカ講座っていうのをやろうとって企画してですね、いろんな人に喋らせて、それをテープ起こして、それを本にしたんですよ。『アフリカ大陸』という本です。筑摩書房から今西錦司編で出てる、グリーンバックという小さな新書版ですけども、それを谷泰君と2人で一生懸命清書したんですね。ところが、肝心の社会とかですね、

社会構造というところが抜けちゃっているんですね。そこはガリバーの著書からですね、ジエ人とかトゥルカナ人なんかの話を引用してですね、それで富川さんの報告と合わせた形で書いたりして、そういう本を作りました。あの時は中尾佐助先生がいたので、中尾先生に持って行って、これ出来たんですがどうでしょうっていったら、読んでくれてね、これなら今西さんの名前で出してもおかしくないな、と言いました。そういうことがあったんです。だからそういった前史があって、それで行きたい行きたいと言っておりましたんですが、63年隊には行けなくて、ベソをかいて、3年後の66年隊に初めて行きました。

で、その時にはケニアへ入って、それからは伊谷純一郎さんのガイドですけども、伊谷さんから、ケニアで車を1台買ってそれに乗ってタンザニアに入れという指令なんですね。最初はですね、もちろん自分で運転しないで、ドライバーを雇いタンザニアに入国しました。国境も本当に簡単でした。検問が遮断機だけなんですよ。遮断機だけでね、ずっと、そういうところで登録って言うか、そのなんか入国のための名前書く欄に書き込んで、非常に楽にすっと通って、アルーシャの町に着いて。

日野：でもね、だけどあれでね、エイジアンて書いたら叱られるんですよ。

米山：そうなんですか。

日野：我々ヨーロッパだ。

米山：我々ヨーロッパなんだ、ムズング（白人）なんですね。

日野：エイジアンと言うのは、アラブ人とインド人だけですよ。分類としてね。

米山：我々はちょっとなんか別のカテゴリーになるようですね。そんなことで、アルーシャに泊まれば良かったんだけど、泊まらないで、そのままギティンへ突っ込んだじゃった。

そこにはですね。和田正平君が一人で頑張っていたんです。で、福井勝義君はもう帰っていたんですね。そこには和田君と福井君が作った小屋がありました。あなたともそこで一緒になりましたけれどもね。あそこへ車で行ったもんですからね、ガイドがないんで、途中から先導しようと言うのが出てきて、それで行ったらまた分からなくなって、もう1台先導して、3台車の列を作って、夜中に着いちゃったんです。そしたら小屋の中では、和田君が酒を作っていたんですよ（笑い）。で、隠せてってわけで大変でした。密造酒の摘発だと思ったらいいんだけどね。まあ、そんなことで初めにそこへ到着したっていうのが、そもそのアフリカです。

だから僕の知っているアフリカというのはですね、まず一つは、そのナイロビでのメカニックと交渉して車を買うっていう、僕は牛若丸っていうニックネームを付けたんですが、その白いフォードアングリアっていう小さな1200ccもない位の車なんですよ。そんなもので、舗装道路の所はいいけど、そうでない荒れた道を走るのは無茶なんですけど、それで走って、という風なことをやりました。

まあ、前座ですからこの辺のところでひとつやめにして、これからスタイルを変えていきたいと思っています。まずですね、このお手元にありますアフリカの地図、この白地図に国の名前を全部入れろっていうことをしたら、100点取れるっていう人はあんまりいないんじゃないでしょうか（資料1）。僕もちょっと怪しい所が色々あります。そういう地図なんですけど、この国境線そのものは19世紀の植民地分割の中で作られたものがほとんどだと思いますけれども、このなかで都市を研究されたことが、まさに日野さんのお仕事としてパイオニアワークだと思うんですけど、鈴木榮太郎先生の薫陶を受けてるっていうことを前提にしてもですね、そのアフリカで都市研

究をやろうっていうそのモチベーションはどういう所にありますか。

日野：先ほど申しましたようにひとつは北海道の都市をやってみて、北海道の都市とアフリカの都市と比べられるんじゃないかと、これは半分本気で半分嘘だったんですけども、さっき言いましたように、ウジジという町は、これは実は最初から決められていたわけですが、この町が非常にある意味で正解だったわけです。

それはなぜかと言うと、ウジジという町は、19世紀の初めに、いわゆるザンジバルを中心とする、アラブ・スワヒリの内陸交易の拠点として発達した集落なんです。19世紀の始めには、奴隷交易の一つの出発点であった、というところなんです。そんなことで、19世紀に出来た都市なんですけど、これが植民地時代に、ドイツの植民地政府に嫌わ



資料1 アフリカ全体図およびイスラーム分布

れまして、それでドイツの植民地政府はウジジから8kmほど西のところに新しい、キゴマという町を作りまして、そこをいわゆる行政の中心にしました。

そんなことで、サウゾールという人がアフリカの都市をAタイプの都市とBタイプの都市とに分けます。つまり植民地時代以前にアフリカの自生的な社会のなかで発展したAタイプの都市と、それから植民地時代の中で発展したBタイプの都市というように分類していきまして、実はアフリカのAタイプの都市の大半は、植民地時代に、そこにBタイプの都市がくっつけられているわけですが、ウジジはそれがくっついてないわけです。8km離れたところにありますから、19世紀以来のアフリカの伝統的都市の色彩が植民地によってあまり汚されずに、そっくり残っていた。だから今でも、ウジジはこの周辺では、低開発の一番遅れたところという、そういうことになってますけど、そういうところに入ることが出来た。そこから始まるわけですね。まあウジジのことはまた後でちょっとお話しします。

米山：あの、イスラームの話と絡んでくると思うんですけどね、それは後にしましょうか。この地図の説明もちょっとしておきますとね、ここがダールエスサラームです（以下、資料2を参照）。

日野：タンザニアの首都ですね。

米山：ここをずーっと鉄道がついてましてね、西に向かって、この終点がキゴマっていう町なんです。このキゴマから南に8km、ウジジがあります。

日野：口の悪い連中は日野先生はウジジで始まって宇治市で終るのかなんて言ってますけれども。

米山：ここにザンジバルがありましてですね、もともとタンガニーカという国とザンジバルがひとつになってタンザニアっていう国になっているわけですから、そのあたりを情景に考えますと、奴隷交易の拠点ですね。

そしてタンガニーカ湖の西の対岸がコンゴになります。そういうところで、コンゴのこの反対側にカレミエっていう町があって、カレミエにも私行きましたけれども、ほんとにこれ、指呼の間といますか、遠いことは遠いんですけども、かなり大きな湖です。

日野：雨期になると見えるんです。

米山：見えますね。それから私はキゴマから連絡船に乗って、ブジュンブラ（ブルンジ共和国の首都）まで乗りました。その時に、そこでお巡りさんと仲良しになって酒を飲んでいたらですね、突然変身してこれから身体検査すると言われて（笑い）、それでびっくりして、今まで飲んでたじゃないって言って、そういうことがありました。まあ別に何にも悪いことをしていなかったから捕まらなかったですけど。そんなことで、私自身もウジジを訪ねましたので、懐かしい場所でもあるわけです。で、実はここの南のところにチンパンジー研究のテリトリーがありまして、先ほど仰った様に、マハレ・・・

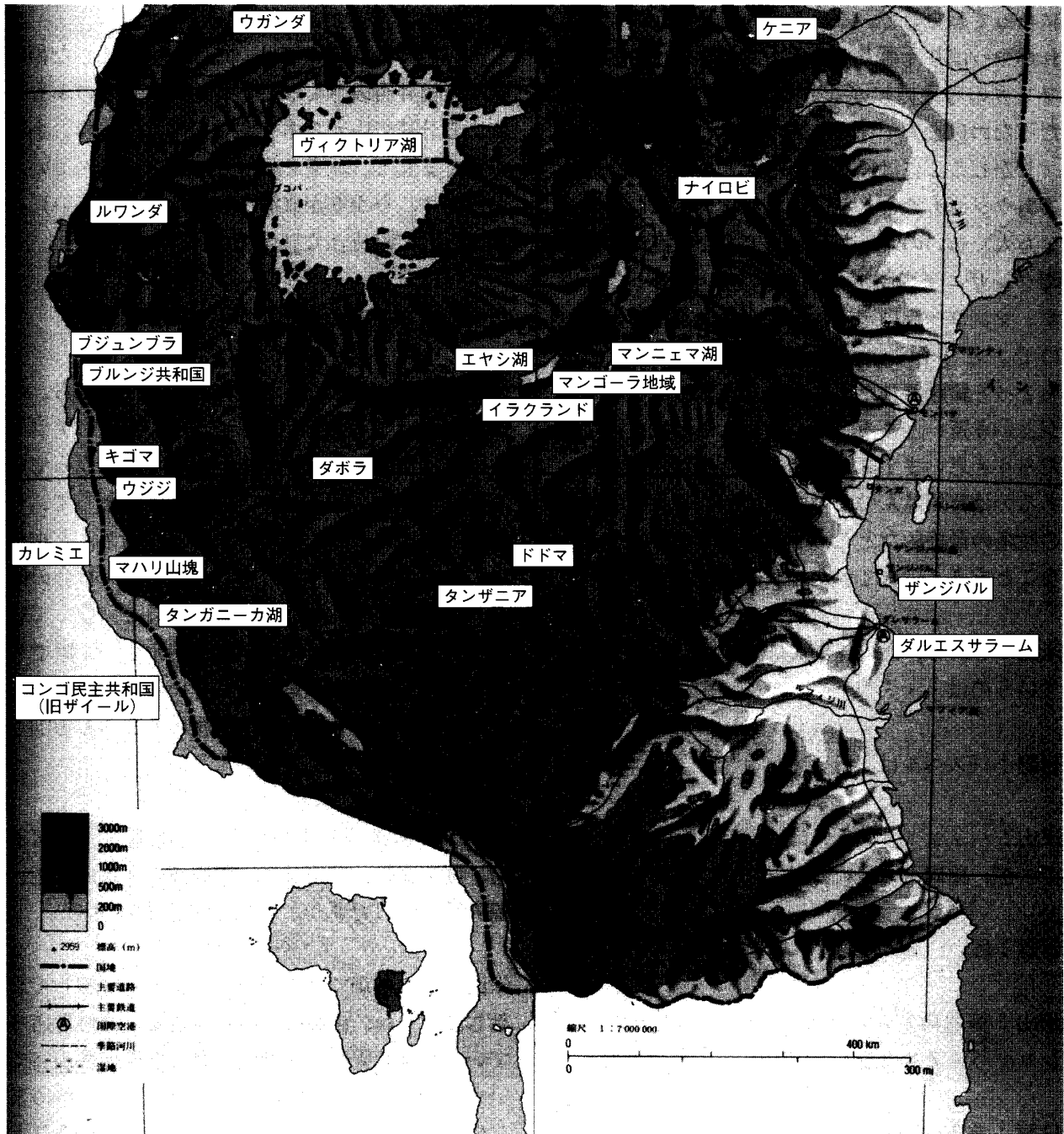
日野：マハレ、その前はもっと北の、カソゲとか。

米山：色々あるわけですけど、その辺の督戦隊みたいな感じで・・・

日野：連絡部隊。

米山：という風なのが日野さんの役割だったと思います。で、もうひとつですね、ここにヴィクトリア湖があって、エヤシ湖、それでこっちがマニヤラ湖があって、このあたりがイラクランドっていうんです。これはスペルを書きますと、今の我々がよく知っている国名のイラクとはスペルは違うんですが、Iraqwと書くんですが、その一番北あたりにですね、マンゴラという地域があります。

日野：九州の4分の1くらいですかね。



資料2 タンザニアおよび関連図 日野舜也監訳「図説世界文化地理大百科 アフリカ」(朝倉書店、1985年)より加筆

米山：大きいですね。そこにあの、もう一隊の人たちが入っていたわけです。その中心は富川さんと富田浩造さんですね。むしろ富田さんがここでは大活躍をして・・・

日野：ええ。そこはね、実は今西先生がそこを選んだわけではないのですが、今西先生が考えておられたことは、今西先生は進化論の人ですから、チンパンジーだけじゃつまらない、人類と結びつかなきゃどうしようもないということで、人類の

進化の歴史として、狩猟採集から牧畜、牧畜から農耕と、そういうことを進化論として考えられていました。

ところがこのマンゴラというところには、富田君が担当したハツツァという狩猟採集民と、それから、富川先生がやったダトーガという牧畜民と、それから、米山さん、和田正平さんがやったイラクという半農半牧民、それから和崎洋一さんがやったスワヒリと言われる農耕民、それが全部このひとつの地域の中に住んでいるんです。一緒

になって暮らしている。そういう場所なので、これがやっぱり今西さんの考えている進化論的なアフリカの考え方にかなりぴったりというところだったわけなんですね。

しかしここには残念ながら、大きな町がない。まあウジジも大きくない、でもウジジはね、人口2万人くらいのちっちゃい町ですが、実はその当時タンザニアでも8番目に大きい町だったので。マンゴーラ周辺にはそういう大きな町がないので、どうもここで都市をやるということとはちょっと躊躇されたようなので、私だけこのウジジという遠いところへ行くということになったんだろうと思います。だけど、もちろん今西さん、あるいは富川さんの頭の中では、この人類の発展の段階の最終的なところとしての都市というようなことを考えられていたのは確かだと思います。

米山：それと、あの採集民はですね、ハツツアっていうのは・・・

日野：（スペルは）H a t z aです。

米山：ハツツア、あるいはハツツアピともいうんですが、藤岡さんなんかは・・・

日野：はい、藤岡喜愛さんね。

米山：藤岡喜愛さんなんかは、あそこでロールシャッハ・テストをやっているんですけどね。

日野：そう、ロールシャッハとバウムテストをやって、これはアフリカの報告書の中に書かれています。

米山：彼はティンディガーっていう・・・

日野：ティンディガーっていうのは外から呼ばれる名前、ハツツアっていうのは自称です。

米山：そうですね。自称と他称で、ティンディガー、ティンディガーって盛んに言ってますけれども、そういう人たちがここにいるわけです。そ

こで集中的にこのあたりを調査した。

一方、イラク調査では、先ほど言いました和田正平、福井勝義さんがですね、ハナン山のふもとに、自分達で山から木を切って来てですね、小屋を建てまして、泥壁を塗って、そこに住んでいたわけです。なかなか立派な家なんです（笑い）。住宅としては立派な住宅で・・・

日野：はい、なかなかです（笑い）。

米山：まあ、そんなことがあって、それから、今西プロジェクトと言いましょうか、京大のアフリカ研究はですね、何冊かまとまった本になっているわけですが、類人猿の方の研究は別として、一番最初にまとまった本がですね、今西さんと梅棹さんの編集だということで、『アフリカ社会の研究』（西村書店、1968年）ということになっているわけです。『アフリカ社会の研究』にはですね、随分沢山の人が参加されているわけで、当然日野さんや和田さんら北海道組の人たちも参加されているわけですが・・・

日野：今西錦司、梅棹忠夫、石毛直道、富田浩造、藤岡喜愛、富川盛道、和崎洋一、米山俊直、福井勝義、日野舜也、和田正平、その辺。

米山：この本ができる経緯もちょっと脱線してお話しますとね、出版社が西村書店で、西村書店っていうのはですね、新聞記者だった西村さんっていう人が、朝日新聞の記者だったのかな、辞めまして、自分には出版社の商売が合うっていうことで、まずこれをやりましようということで・・・

日野：初仕事で最後の仕事。

米山：そうなんですね。たちまち破産して、版權を没収されて、他の本屋で・・・

日野：他の本屋でもう一回同じ本が出てるんですね。上下になって、僕見たことないんですけど・・・

米山：僕も見たことないんですけど（笑い）、広

告は見ましたけれどもね。で、あんまり売れなかったと思うんですけどね。まあ、そんなことが一つありました。あんまり脱線してると大事な話になりそうにありませんから、要するに基本的には、今西さんの頭にあったのは、人類の進化ということを念頭に置いてられて、その中ではもちろん、バイオロジカルな意味での進化もあるわけですけど、普通の社会人類学のキンシップ（親族組織）とかそういうことばかりでやっているのはだめだという風な認識もあったんだろうと思います。そのあたりから、都市の研究をやるという風に考えたんじゃないかと私は思います。農村、農民、ペザントですね、ペザントの方もどちらかという、最初の頃の類人猿中心の、要するにK U A S Eと言ったんですが、アフリカン・・・なんだけ。

日野：“Kyoto University African Scientific Expedition”。

米山：そうそう、「京都大学アフリカ学術探検隊」。

日野：クワセモノと言っていました。

米山：クワセモノだったんですが、クワセモノのところはむしろ農耕研究を割合に差別されるみたいな感じで、牧畜までいいんですよ。だから富川さんくらいまではいいんですけど、和崎さんのやっているスワヒリっていうのは「あれはなんだ」というところが多少あったと思います。ですけど、それにめげずに和崎さんは非常に優れた研究（「部族混合の研究」）をなさったと思います。私の自己批判をちょっと付け加えさせて顶きますと、私自身は、エド・ウィンターなんかに教えられているわけですから、ソーシャル・アンソロポロジーっていうのが一番と考えたんですね。キンシップスタディーズとか、母系とか父系とかですね、そういう話とか、頭がそっちの方に行っちゃっていた事がひとつ。それからもうひとつはですね、モノグラフを書くとしたら、イラクならイラクっていう農耕民についてだけやればいい

んだと、それと他の異民族の混合というような事は、排除すべきであるという、そういうふうな、非常に頭が固い・・・

日野：ストイックっていうか。

米山：ストイックというかな、そういうところがあったんですね。それを、あの和崎さんは始めから否定しているんですね。行ってみたら沢山の部族、いわゆるトライブがあつて。

日野：だからマンゴラのスワヒリの場合だったら、30くらいの別の部族が集まった人が開拓社会の募集で集まった人ですね。

米山：一緒に活躍しているわけですね。だからこれはもう「スワヒリ社会」としか呼びようがないわけですからね。そこで「何々族のモノグラフ」なんてことは、頭に置かないというか、そこが非常に面白い視点だと思いますね。それで、富川さんにしてもですね、ダトーガをずっとやっていますけれども、ダトーガも単に始めからダトーガだということだけでやって、だんだんダトーガが移動するんだということに気が付くわけですね。これは結論のところを聞きたいんですけども、つまり大陸ですから、人は動くんですよ。

日野：そうです。

米山：それこそもう、随分遠くからの人がですね・・・

日野：動かないと都市できませんし。

米山：そうですね。で、一番大きいのはやっぱりバンツー・エキスパンションで（資料3参照）この辺からでて、ダーっとですね、こちら側に接近するし、こちらにも入りますしね、ケニアバンツーもあるし、南下してですね、ここまでですね。

日野：約2000年の間に8000キロ動いてんです。だ

から年速4キロで動いてるんです。

米山：人が移動しているというところがあるんですね。ですから、そういう風なことを前提にして考えないと、アフリカは駄目なんですね。私の自己批判で、僕はイラクなんで、盛んにイラクばかり言っていたのは、馬鹿じゃないかということを感じます。

で、このイスラーム研究というのはあるところから盛んになりまして、その結果のひとつとして、『イスラームの都市性』という小さな学振新書というのが出ているんですが、その中に私はアフリカにおける都市とイスラーム研究という、アフリカにおける都市とイスラームの研究について書きました。これは、学術振興会の月報に書かされたものなんで、後になって本になったものですが、その中でですね、ちょっとだけ紹介しますと、日野さんが作った言葉として「田舎イスラーム」という言葉があるんです。1968年の東アフリカの都市におけるイスラームという報告をアジア・アフリカ言語文化研究所の共同研究、「アジア・アフリカにおけるイスラーム化と近代化」の研究会で報告したところ、そのスワヒリのムイスラムハッサ・・・

日野：ムイスラムハッサですね。

米山：ムスリムそのものということには、イスラーム社会に共通して見られるはずの、いくつかの基本的慣習が見当たらないというところに議論が集中して、イスラーム社会は喜捨とか巡礼とかいろいろなルールがあるわけで、それがですね、いいかげんじゃないかという批判が出てですね。それで日野さんはウジジの人々の信仰形態、あるいは生活様式に「田舎イスラーム」という言葉を付けたというのが、これはひとつ非常に面白いエピソードだと思います。東アフリカの場合はザンジバルを始めとして海岸のモンパサとかタンガとかダルエスサラームなど伝統的なイスラームの古い歴史を持つところがあって、それに比べますと、ここから1200キロ奥ですから、そういうところで、内陸のキャラバンルートの一地点であるウ

ジジの場合はムスリムたちも大きく変質したっていうことが分かるというわけですね（既出資料1参照）。で、この「田舎イスラーム」については、板垣雄三氏などはあんまり気にしないでいいじゃないかと、一種の弁護をね、アフリカ人だったらそういうことも・・・

日野：私とかマレーシアをやっていた坪内良博さんとか、インドネシアやバングラデッシュをやっていた原忠彦さんとか、そういう人たちがこういうフィールドワークに基づく発表をどんどんこの研究会でしだしたんです。そこで、イスラームの多様性ということが出てきたわけです。で、そういうイスラームの多様性ということが、それまでの前島信次先生以下のいわゆる、文献研究による日本の正統なイスラーム研究の中では出てこなかったわけです。

それともうひとつは、板垣さんとか三木亘さんとかも含めて、その時代に私なんかと同じ頃の時期にフィールドワークでイスラームを見るという、そういうデータが集まってくるわけです。それまではコーランに書かれていることを研究するとか、あるいは歴史的に何世紀のイスラームはどうだということをやっていましたけれども、現代のフィールドのデータで言うようになったのは、まさに我々のあたりからです。そうして「田舎イスラーム」と、私は卑下したんじゃないです、威張って言ったんですけどね（笑）。

米山：そのあたりのことをですね、やっぱりちゃんとしっかり押さえておかないと、日野さんの実力が分からなくなってしまいますから、と思ってこの話題を取り上げておきたいと思ったんです。

日野：少しウジジのことを話させていただいていいですか。

米山：どうぞ。

日野：私が、最初に選ばれて行ったのがウジジという町でした。当然私なりに都市へのイメージというものがあるわけですが、ウジジに行ってみ

くりしました。まず第一に2階建ての家が一軒もない。深くて、断崖続きのタンガニーカ湖のなかでは、このウジジあたりは、めずらしく湖岸からずっと砂地で、ひろい通りの両側に、家がだーっと並んでいて、どこの家にも裏庭には大きな木が生えてますので、遠くから見ると町なんかに見えないんです。飛行機から見たら初めて町だという事が分かりました。飛行機に乗って行けたのはだいぶ後のことですが、とにかく道を歩いていますと、両側に家があるので、塀で囲まれて、その裏は屋根よりもずっと高い木が植わっています

から、ちょっと遠くの方から見ると、むしろ森と言うか、一大緑地に見えるんですが、それが実は町だったわけですね(資料4)。

で、大体この町は、皆イスラーム教徒が大半です。それで、最初は言葉が出来ませんので、何をやったかって言うと、この町や道にはどんな人がいるんだろうかと観察しました。そうしますとまず、やはりイスラームの服を着て、礼拝に集まってきたりする、そういうアフリカ人がいます。彼ら自身はシシ・ワスワヒリ、我々はスワヒリ人だという意識を強く持っているわけですね。そしてそれに対して、そこらで半ズボンをはいてぼろぼろのシャツとか、あるいはその頃だとまだ、羊の皮などを着ながら荷物を運んだりしている人がいます。それがワハというグループで、このウジジにおける肉体労働者層ということになります。それから役所に行きますとネクタイして威張っている人たち、これはほとんど中央政府から派遣されてきた人たち。これは偉いわけですが、この人たちをウジジの人たちが何と呼ぶかというと、ワゲニ、つまり「お客さん」と呼ぶわけですね。それに対して自分達はワナンチだと。ワナンチというのは言うなれば「土地っ子」という意味です。だから、自分達は土地の子だけど、このエリート達は赴任が終わったら帰っていくお客さんだというような言い方があります。そしてその他



資料3 言語集団の移動(グレガーソンによる)

に、アラブ人、インド人、それから僅かですが、ヨーロッパ人がいました。そのようなことがまず始めに見えてきます。

そうしますとそこで階層はどうなっているのかとか、その人たちの間の、ひとつひとつのサブグループの間の関係はどうなっているのかということが少し見えてきます。そうするとやっぱりインド人は威張っていますし、ヨーロッパ人は端っこに外れていますが、アラブ人はアフリカ人に大きな顔をしています。そしてアフリカ人のなかでもスワヒリと自分を位置づけている人たちはやっぱり肉体労働の人たちを下に見ているわけですが、面白いことに、仕事などを頼むときは、凄く丁寧にお願いするんです。決して、お前やれ、って命令口調というようなことではなくて、ある意味では対等に、これをやってくれないだろうかというふうなお願いをするんです。それはつまり、もっと言え、社会階層としては上下がありますけれども、それぞれ独自性を持ったグループですから、その人たちに対して、無礼なことはやっぱりやってはいけません。それから、その下の方の人、そんな言い方なら私はやらない、ぐらいに言いかねない。そういう非常にはっきりとした、お互いに相手の階層を認め合うようなところがあります。

別の例を挙げますと、西アフリカのカメルーン

の場合、私がいた町で、奴隷階級の人と、そうでない自由民の人がいます。そうすると、自由民の人はフルベ語という言葉でぺらぺら喋ります。そうすると、それに対して奴隷身分の人は、ブーム語という言葉で答えるわけですね。お互いに、両方の言葉を知ってるわけです。だけど決して、上の自由民がブーム語を喋ることはない。フルベ語しか喋りません。それに対して下の奴隷の人たちはブーム語しか喋らない。お互いに違う言葉が行き交うんですが、もちろん双方の頭の中では両方の言葉を理解していますんで、話が通じるという。そのようなことも、アフリカの都市の中で凄く面白いことなんです。

そうしてウジジの町で、まず最初に見たのが職業と階層ということです。で、その次に見えてきたのはやっぱりウジジにいるスワヒリと呼ばれる、ウジジの大半の人がどんなことで自分たちをスワヒリと思っているのかということ。私はそのひとつを近隣関係、つまり彼らが毎日日常的に暮らす近隣関係の中で、もうひとつはウジジの人はスワヒリ同士で結婚していますから、結婚するとお互い血縁になってくるという、その両方から見てみようかなと思ったんです。で、その近隣関係ですけれども、最初はなかなか見えません。

そうして見ていますと、ウジジの人たちの家っていうのはイスラームの家ですから、通りに面して家がありまして、その裏庭が塀で囲まれていて、その裏庭のことをウアと言って表をバラザと言うんですが、バラザは男の集まる場所です。それに対してウワというのは、これは家族のプライベートな空間で、言うなればそれぞれの奥さんと子ども達という、女性の空間といってもいいと思います。だからあまり親しくない男のお客さんが来ますと、バラザでしか応対されませんが、女のお客さんが来ますと、もう何も言わないでそのまま裏庭に行って、そこでお話が始まるという、そういう事になっているわけです。

私がお世話になっていた家では、私が裏庭に行っても怒られませんでしたので、裏庭でいろいろ見ていましたら、隣との間の塀が壊れてまして、その隣とも塀が壊れてまして、その向こうも壊れている。でも壊れているのに全然直していな



資料4 飛行機から見るウジジのまち

いんです。だからうちのおばちゃんがマメ剥きを始めますと、向こうの方から、ああマメ剥きやってるね、なんて言ってよその奥さんが来てマメ剥きをする、子どもたちはその間を駆け回る。ところが、それほど親しくないところの間は、塀が壊れたら直します。私がそれを人に聞いたらこれは誘導尋問になりますから、聞かないでいたら、ある時、親しかった2人が喧嘩をして、そしたら次の日にその一人が野原に行って草を持ってきて、塀を閉じてしまうということが起こりまして、「ああ、これだこれだ」という。

それでウジジの街を全部見ますとね、大体5、6軒ぐらいつつ塀が壊れても直さないグループがあります。これをずーっと観察していると、そこでは明らかにいろいろと日常的な協力があります。大体ウジジは町ですから親戚同士が隣り合わせという事は非常に少ない。そうしますと、その何軒かで塀を壊しても直さない家はやはり非常にいろんな協力をします。例えば、その中には、社会的知恵は老熟しているが、もう年をとって貧しい老人もいれば、一方、若くて元気に稼いではいるが、社会的知恵のまだ未熟なものもいる。そういう中で若者が、近所の貧しい老人を援助するようなことが起こります。でも、それは、相手のプライドを絶対に傷つけないようにやらなくては行けない。これを、ジトア (jitoa、自ら差し出す) といいます。つまり、こちらから申し入れないといけないのです。あんた貧乏だから金やるよ、とか言ったらこれは貰うわけがありません。あなたはもういいイスラームなんで、今回ちょっと畑で収穫物があつたんでそれをお届けしますとか、そ

ういう風にちゃんと体面を考えてやらなくてはいけないんですけど、その代わり、若い人が失敗しますと、例えば私がお世話になったご主人が酒を飲んで酔っ払って奥さんを殴って、奥さんが実家に帰ってしまうと、そのような時には、隣のおじさんがわしが謝りに行ってやると言っ、年寄りの人が行ってくれる。そのような形の日常的な協力が裏庭同士であります。

そして今度は、表通りはどうなるかと言うと、表通りは結婚式とか葬式になると大体関係を結びますし、それから共同作業、例えばお偉いさんが来るから表の道の草を取れ、といったときには協力しますし、勿論フォーマルな近隣組織というか、行政組織は通りを一緒にするという中で起こってきます。それで私は表を一緒にする、裏庭を一緒にするグループをウジジにおける第一次近隣集団として、そして通りを一緒にする方を第二次近隣集団、さらにその通りにいくつか出来るモスク、イスラームの教会ですね、そここのところ出来るグループを第三次近隣集団、それらが日常、非日常的に積み重なっているところに注目していました。

そしてさらに、それを糊のように結び付けているのはウジジの人たちのお喋り集団です。大体ウジジの町は私の調査では85%は顔見知りです。で、私が、私の主人のムゴイと一緒に歩いていると、向こうから誰それが死んだの知ってるかい、というような話になります。知らなかったとか、知っていると、そうすると市場で1キロくらい歩いていくあいだに、その人が死んだときの様子や、その人の若い頃のいろいろな失敗なども含めたライフヒストリーから、最期の彼がいいイスラームで死んだという評価まで、だいたいそのお喋りの中で、全部聴けたり話し合える、そういうことになります。もちろんウジジの人たちでラジオを持っているのはそのころ30人に1人もいませんでした。新聞なんかも来ません。雑誌もありませんので、基本的なニュースの伝わり方は、その毎日のお喋りの中で、そしてそれが近隣とかそういう結びつきのうえに、それを糊のようにくっつけている、そういうものになっているということが分かってきました。

実はもうひとつ、私がウジジにいてよかったのは、スワヒリ文化という東アフリカの地域文化ですね。特に沿岸部のスワヒリについては非常にいろいろな研究があるわけですが、私は運良く、一番その中の田舎、一番フロンティアのところであるウジジで調査をしていたわけです。

ウジジの人たちは、私はスワヒリだということをものすごく誇りを持って言うんですけど、海岸にやってきますと、お前スワヒリかって尋ねると、私はスワヒリなんかじゃないよ、アラブだよとか、そういうことになってきて、スワヒリ意識というのが、むしろ軽蔑に近い意味になってきているわけですね。ところがウジジの人はそれを、わしはウジジ・スワヒリだって威張るわけです。この現象は石毛（直道）さんがやった、マンガラの開拓社会にも見られるわけです。

そんなことで、このスワヒリ文化が、沿岸から内陸へ、内陸からさらに村落へと広がっていくなかで、そのいろいろな要素がひとつひとつ落ちていって、最後に残るスワヒリ意識は、スワヒリ語を喋るだけだ、と。海岸で出来たスワヒリ文化は、混血文化ですから、アラブとの関係があって、それがまずウジジで落ちていきます。ウジジでは都市性がありますが、マンガラに行きますと都市性が落ちてきます。そしてさらにマンガラでは、スワヒリといわれる中に、実はキリストもちょっと入っているんです。それは何故かと言うと、要するに農耕民としての大意識というのがありまして、この場合はイスラームも入って、キリストも入って、スワヒリなんですね。ところが、そのマンガラの中ではもう一つスワヒリの意識があって、それはイスラーム教徒だけという、そういうのがあるんです。ところが、イスラームのいないマサイ社会に行きますと、ネクタイをしめて、その頃独立間もないですから、国のお偉いさんが演説に行くわけですね。スワヒリ語で話すわけです。マサイの人はそんなにスワヒリ語が出来ませんから、聞いていてあいつはスワヒリだという、そういう事になってくるということで、スワヒリ文化というものを取りあげた時に一番フロンティアの方から見たので、その地域的な、歴史的な構造が分かったという、これは私が

やったひとつの大きな発見かなと思っています。この論文を書いたときに、アメリカやイギリスの何人の方からこんな面白い論文見たことないと言われたこともあります。そんなことがこのウジジという、私の最初の町でできた、口幅ったく言えば、日本のアフリカ研究者が初めてやったアフリカの都市研究ということになるのかな、と思っています。

米山：ウジジの話からもうちょっと展開したいんですが、今度は隊長としてカメルーンへフィールドを移されて、そちらがかなり本格的な展開をするわけですね。

日野：ええ、これはですね、私でなくやはり富川先生が隊長なんです。私が日本に帰ってきました、アジア・アフリカ言語文化研究所に入って富川先生と一緒にアフリカ研究をやることになったんですけれども、そのころもう1970年代に入ろうかというとき、日本でアフリカをやっている人たちはかなり多くなってきました。だけどその多くが東アフリカに集中してるんです。で、西アフリカをやっている人がいないということになりました。この東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所での最初の研究を西に行ってみようということで、それでこのカメルーンという国を選んだわけですね（資料5）。

カメルーンを選んだのは、いろいろな理由があります。ひとつはこのバンツーというのはずっと西の方からずっとやってきて、東部アフリカへ移動していった。また、マードックという人がヤムベルトと言っていますが、東南アジアからやってきたヤムという作物が西アフリカにひろがっていった、西アフリカ森林部の人たちの主食になっています。それからメッカ巡礼などでイスラーム教徒が行き来するとか。だけど、どれをとっても、カメルーンという国を通らないといけないんです。ここはそういう点では、西と東を結ぶ橋みたいところなんで、ここを通らないといけないということになります（資料2、3参照）。

しかもカメルーンは一番南側の熱帯雨林から、北部の砂漠に至るまで、アフリカの気候の特性を

全部持っている。それからさらに、この国は、西半分がイギリス植民地なんです。そして東の大半がフランスの植民地で、イギリスとフランス両方の植民地の跡というのが、この国では見られるんじゃないかと。しかもそういう形で一国ができていると言うのは一体どういうことなんだろうかということが見られるんじゃないかということ。それからもうひとつは、北がムスリム、南がクリスチャンという西アフリカの多くの都市、国の共通点も持っているということで、このようないろいろな特性を勘案して、このカメルーンを選びました。

そして、1969年にカメルーンへ行ったんですが、最初は大変苦労しました。それは何故かと言うと、カメルーンにはフランスの研究者がいっぱいいます。すでに伝統があって、イルカムというフランスの国立のカメルーン文化研究所なんてあるわけですね。そしたらまず第一に、そんな日本からやって来て、このカメルーンに来て何をやるんだと言うわけです。つまり彼らはやはり植民地時代からの結びつきでそういうことを研究しようとしているわけですが、我々ははっきり言えば、カメルーンとは何の利害関係も無いわけで、そういう点でいえば、なんでカメルーンに来て調査をしなくちゃいけないんだっていう、そういうことが一番最初に我々が説明しなければならない大きな問題でした。なんとかそこもクリアしまして、特にカメルーンの中でエルドリッジ・モハammadウなんていう、非常にかけがえのない歴史学者ですが、彼と共同研究できるようになりました。

それで、このカメルーンに来て、2ヶ月間で180キロくらい旅をしまして、私のフィールドを探します。一緒に行った端信行君はヤムベルトにあたる場所に住んでいるドゥールの村をやることになって、そのあと、私と富川さんがずっと車でまわって歩いていまして、いい場所を見つけます。これが、バングブームという小さな村です（資料6）。で、最初はあまり考えなかったんですが、この小さい村が実はブームという民族の首都なんです。つまり王様がいらっしゃるわけです。これはウジジにはいません。

ただ、この西アフリカをやるにあたっては、私

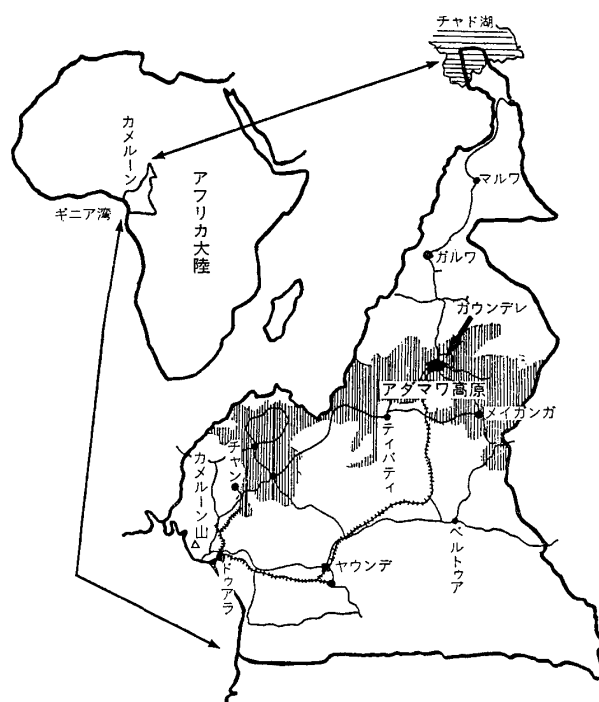
が東アフリカでやったことへの自己批判があります。何かというと、私はウジジという町では全く車も持たず、足で歩いて調査をしてましたから、ウジジの町での調査は出来てるんですけど、周りの地域社会との関わりまでは調査出来ていなかったんです。都市研究をやるのにそれが無いというのは、ある意味では致命的なんで、カメルーンではまずそのバングブームという小さな村に入って、そしてそこできちんと調査をやってから今度はその中心都市、その村人たちがいつも出て行く町へ出て行って、そこも調べてみようということになります。

ところがもうひとつ大変なことがありました。スワヒリ語の場合もそうでしたが、このカメルーンの人たちは私が知っている言葉をひとつも知りません。日本語、英語、スワヒリ語はだめです。私にとっては、向こうの人たちが喋れる言葉、ブーム語、地域共通語のフルベ語、それから公用語のフランス語、全部だめでした。それで、しょうがないので、日本へ帰ってからアテネ、フランスなどに行きまして、フランス語を一応勉強したわけですけど、そんなこともあり、カメルーンでは村から都市へ地域を見ることができたわけです。そしてしかも、その村にも、それから都市にもイスラームの王様がいます。そういうことでウジジと非常に違う、西アフリカの典型的な種類の都市を見ることができたということになります。

そしてこのカメルーンのガウンデレというあたりがウジジと共通していることがあるんです。それは何かというと、ウジジは先ほども言いましたようにスワヒリ文化がずっと内陸へ広がっていった、そのフロンティアです。それに対して、カメルーンのこのあたりはフルベというイスラーム牧畜民の征服国家ができて、イスラーム首長国となってガウンデレを首都にします。そうして多くの地域がイスラームに改宗させられます。その一番フロンティアになるわけで、そういうことで西アフリカの都市文化のフロンティアと東アフリカの都市文化フロンティア、その両方をここで比べることができたわけです。

そしてカメルーンでは王様がいてる社会をやったわけですが、ところがここガウンデレのイスラ

ムの王様がまた大変面白いんです。周囲のブーム族とかドウル族とかそういう部族を征服して、王様ができたわけですが、この王様をずーっと何代も調べていきますと、ほとんどの王様のお母さんがブーム族の女性なんです。ということは、理論的に言えば、最初にフルベ100だったけど、その次はブーム50、フルベ50になりますよね。その孫は4分の1になります。だから実はこのブームの王様はフルベの顔をしていない、ほぼ完全にブームの顔をしている。だけど父系社会ですからそれで問題は無い。それからお母さんがブーム族の慣習の中で育てますから、実はフルベ語よりブーム語のほうが元々の母語なんです。だから普段ブーム語は喋りませんが、私なんかが行くと喜んで喋ってくれるんです。つまりそっちの方が上手なんです。そして、しかもその宮廷へ行きますと、その共通語はブーム語なんです。だから私にとっては大変好都合だったんです。そしてしかも、王様の周りでいろんなことを司っているのもブームの人なんです。で、フルベの重臣達ももちろんいますけど、フルベの重臣が王様に会いに来るなんてことはほとんどありません。それから王様の屋敷は、王様の所まで行くのに、入り口の家というか、両側に入り口がついている家を7つく



資料5 カメルーン全体図

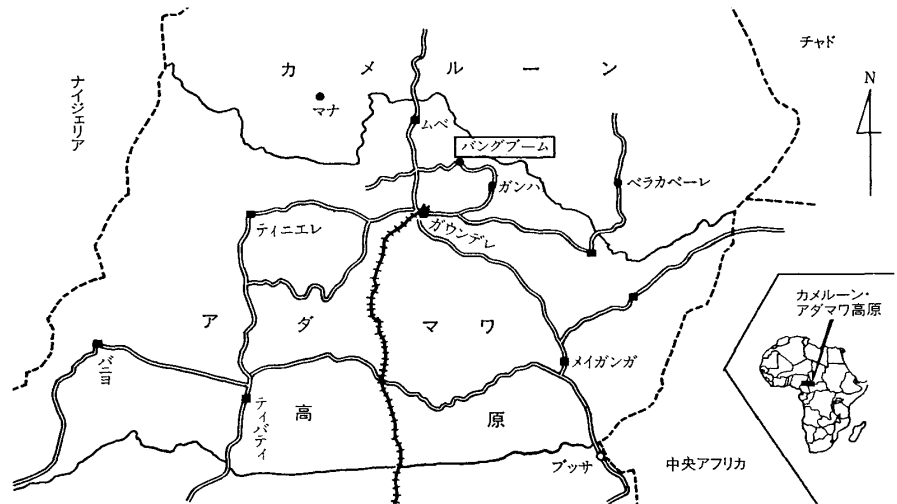
らい通っていかなければなりません。このようなものは、カメルーンのアダマワ高原周辺しかありません。もっと北の方のマルアやガルアへ行ってもフルベの王様はいますけど、全然そんなことがない。明らかにこれはブーム族の聖なる王様が持っている家の形を真似しているというか、継承しているわけですね。それから王様は子どもの時から

ちろんイスラームですから、割礼をしているんですけど、その割礼はブームの人たちと一緒にやっていた。フルベの人たちは自分たちで割礼やりませんので、今は病院行ってやりますけれど、昔はその割礼は全部ブームの割礼師によってやっているんです。

というような形で、そこで言いたいのは、さっき米山さんが自己批判で言われたように、アフリカの社会をやるときにひとつひとつの部族というのは、もちろんそれも意味があると思うんですけど、そうではなくて、むしろいろんな部族の歴史的な関係の中で見ていくしかない。そしてそれが最もやっぱり基本的に現れるのは都市社会なんですね。

そしてさらにもうひとつ言いますと、東アフリカではスワヒリ文化も植民地文化も海岸から内陸へ行ったんですけれども、西アフリカではイスラーム文化は北の方から来て、そして植民地文化は南の方から来たので、明らかに方向が違いますね。だからそのぶつかり方が物凄く面白いんです。和崎春日さんがやっている、バムーンなんていう民族はイスラームになったり、キリスト教になったり、イスラーム系になったり、キリスト系になったり、そのうちにイスラームとキリストを一緒にしたような宗教を自分で作っちゃったり、というような事が起こっています。だけど、東アフリカではおそらくそういうことは起こらないわけですね。

さらにもうひとつ言えばアフリカの地域共通文



資料6 北カメルーンのアダマワ高原

化というものが広がっていく時に、スワヒリ的な広がり方というのはある程度理論的に言えるだろうという事。そしてそれがあある部族とぶつかった時には周辺の部分から変わっていった、うんと長くその関係が続くとその一番中心の部分まで影響を被るという、まあフィッシャーなんかに近いようなことがここで言えるんじゃないかなあというふうに私は考えています。

米山：どうもありがとうございました。そちらの話をもっと聞きたいんですけど、まだ30分あるのでゆっくり聞くことにしましょう。今の所ですね、私が知っている京都のほうの流れを少し紹介しておきますと、ひとつはですね、今西さんの影響が強かったということもありまして、類人猿、プライマトロジー、そちらの方の研究が平行して進んでいたというところがある意味で特殊な例なんじゃないかと思います。ただ、これはちょっと僕は不幸なことだと思うんですけれども、国立民族博物館ができて、そこに梅棹さんたちが乗り込んで石毛さんとかをみんな連れていったわけなんですけど、そこでですね、どう言えばいいのかな、一種の、排除の論理が働いたんですね。霊長類やってる人はいらないうって、もちろん会ったら仲良くアフリカ学会などをやっているわけなんですけど、あそこはなんとなくそういう分立がありまして、文化・社会人類学はいいけれど、自然・形質人類学は別だという、私に言わせるとある意味狭い、偏狭な部分があったのではないかと

いう気がするんですよ。僕は今もあそこの評議委員をやっていますから、評議委員の立場で言うとならばですね、もう今度独立法人になりますから、その評議委員も解散するという話なんですけど、とにかく何か非常に内部的なセクショナリズムがあったのではないかと、私は外から見ていての話なんですけれども、やっぱりあれだけ大きな所帯になってですね、その中に一人も自然人類学者がいないというのはある意味ではおかしい話なんですよね。そのあたりについて私はちょっと批判的なんです。

それはともかくとして、私たちの京大の活動の拠点は、ご存知のように「近衛ロンド」なんです（編注：近衛ロンドの詳細は本誌同号掲載の『京都と文化人類学』米山俊直先生講演の稿参照）。京都大学人類学研究会という呼び方をしますが、京都大学楽友会館で毎週水曜日の夜に必ずやっていたわけです。おかしい話なんですけど、学園紛争の最中でもやっていたんです。あそこに行けば誰かに会えるっていう、そういう場をずっと延々と続けてきたわけです。それがあある意味でエネルギーの蓄積の場所にもなるし、それから出撃していく場所にもなっていたのです。

それに加えて、私が京大にいた時は教養部ですから、幸か不幸かですね、9学部の学生が全部入ってくるわけですよ。医学部もいれば薬学もあるし、農学部もあるし工学部もあるし、いろんな学生、いろんな関心を持った人が、私の文化人類学実習というコースに入ってくるわけです。

最初の頃はですね、一番最初は農村調査をやったんです。今、篠山市になっていますけれども、篠山町の北に西紀町というのがあったのですが、ここは過疎山村とさえいえるのでしょうか、そういうふうな所なんです。夏休みに皆で行って、1週間ほど合宿をして、ということをやったんです。その実習に参加した学生の中で1人、名前挙げてもいいと思いますが、林和生君っていう、國學院大学の先生になっている人。彼が西紀町の秋のお祭りを見てきて写真を撮って来たんです。そこにですね、春日神社という神社があるんですが、山車を作ったんだけど、引き手がいなくて、そのまま居祭りになってしまって、動か

ないんで、境内に立ててあるんです。その写真を撮って来たんです。あれ、これはどこかで見たことがあるよ、というわけで、まさにそれは祇園祭と同じ流れなんですね。で、これだったらなんにも西紀町まで行かなくても、京都の町でやればいいじゃないかということになって、フィールドワークの対象を祇園祭に変えたんです。それが73年です。73年から、73、4、5とお祭りの調査をやったんです。この連中がとにかく皆偉くなって大学教授がいっぱいいるんですよ。おかしいんですけどね。そういう実習の日が水曜日の午後なんです。午後いっぱいその文化人類学実習に当てて、それが終わったらそのまま楽友会館に流れこんで、近衛ロンドでまたおだおだやるというパターンがですね、ずいぶん長く続きました。

こうして祇園祭を3年間やりまして、3年やったらこっちもいい加減飽きてくるし、インフォーマントになってくれる人たちも、また来たかって話になって、だんだん嫌がられそうになって、調査をやめまして、その翌年は生駒山へ行ったんです。生駒谷というのはいろんな神様がいて、宝山寺、聖天さんという恐ろしい神様がいて、歓喜仏のお祭りをしている所もありますし、それから西側の額田谷の方は石切さんというデンプの神様もおりますし、それから小さな沢ひとつに点々と小さな霊場ができています。これ全部が“朝鮮寺”と呼ばれる、コリアンの修行、禊をするようなお寺がひとつの谷にですね、ずっと連なってできているわけなんです。非常に面白い所なんです。そういうのがあったり、その生駒山山系、信貴生駒山系というのは非常に面白いっていうので、それを1年やったんです。

そうして山へ登ってみますと、向こうに見えるのは大阪湾です。大阪なんですね。今度は天神祭か、ということで、それで調査対象が天神祭に変わったんです。ですから、76年に生駒山をやって、77、78、79、と天神祭をやったんです。それでその後三大祭って言って、江戸なんですけどね、江戸まで行く予算が無いものですから、それは諦めて、マージャンの並べ方じゃありませんけど、京阪神という並べ方もあるじゃないかと。そういうわけで神戸祭をやったんです。神戸祭を2

年、3年やったのかな、そういう形で、それが第一ラウンドです。83年になってもう一度祇園祭に帰ってきたんです。83、4、5とやりました。そしてまた天神祭をやって、結局93年に第3ラウンドの祇園祭をやって、私の都市祭礼調査終わり、というふうな変なことになったんですけれども、その間に私がアフリカに行ったりして時々抜けたりしていますから、学生達をひどい目にあわせたりしてるんですけれども（笑い）、そんなことをやってるんですね。

とにかく都市を対象としてやるためには1軒1軒アンケートを取りに行く、なんてことは断られるに決まっていますが、お祭りの日ですとね、むしろそれがオープンになっている。いらっしゃい、いらっしゃい、といろんなことを教えてくれるんですよ。だから祭礼というのは非常に大きな調査のチャンスでもあるし、そこでいろんなものを見つけることができるんじゃないかというのが、ひとつのモチベーションなんです。たまたまそういう形で、都市を対象にしてフィールドワークを始めたんですね。そして「都市と農村」ということで、私は放送大学でもラジオ番組のテキストを作りましたし、それもあって、これはレッドフィールドなんかも言っている話だけれども、都市と農村の連続体ということを考えておく必要があるなと思っていて、それは非常に重要なことではないかと考えているわけなんです。

私が最後に文部省研究費でやりました調査は、「アフリカイスラームの都市農村の動態比較」です。これは嶋田義仁君、宮治美江子さん、それから梶茂樹君、末原達郎君、杉村和彦君、そういう人たちが参加して、各地でやったんです。私自身は北アフリカモロッコの王都フェスへ行っただけです。文部省研究費のシステムが変わって、隔年だったのが、89年から89、90、91と連続して調査できる形になったんですね。そのおかげで私も3遍、一度は非常に派手に全部見てまわったりもしたのですが、それはちょっと視察のような格好で、要するに昔歩いた所を回る、つまり『舞踏会の手帖』のようなことをやっていたんですね。そして最終的にはフェスを挑戦いたしました。フェスを調査したらいろんなことが分かりましたし、

郊外の村も少しやりました。

それですね、今日最後にちょっと宣伝したいと思いますが、ここに来ておられる松田素二君がですね、『呪医の末裔』（講談社）という本を書きました。ご存知の人も多いと思いますが、すごく面白いんですね。これはあのオデニョっていうケニアの、彼のお得意のマラゴリですか、オデニョさんという人の一族ですね。その一族4世代の末裔のライフヒストリーの形でもって現在のケニアの都市と、ナイロビを中心とするいろんな都市と農村との関わり方といったことをですね、非常に詳しく面白くダイナミックに書いてあります。その前にアフリカの都市人類学、『都市を飼う慣らす』（河出書房新社）という本もあるんですが、都市人類学としてですね、こういう人が育ってきているということはやっぱり日本の人類学は非常に展開してきているというふうに考えていただいていいかと思います。例えば嶋田義仁さんの『優雅なアフリカ』（明石書店）という本もありますし、それから末原達郎さんの『アフリカの食糧生産』（同朋舎出版）という大きい本がありますし、梶茂樹君もですね、『アフリカをフィールドワークする——ことばを訪ねて』（大修館書店）という、そうやっていろんな人がですね、動態調査をやって下さっているというふうに思うわけです。そういう形で、日本人だからという必要は無いかもしれませんが、これから日本で生まれた人間がですね、アフリカに押し寄せて行くということについては、今後も意味があると思うんです。そのあたりについて、どうぞ最後の締めくくりをお願いいたします。

日野：私はアフリカへの調査は、主に富川先生との共同研究ということになったんですが、1986年に私は富川先生から独立を許されまして、暖簾分けをされまして、アフリカ都市社会の比較研究、比較調査というプロジェクトをやりました。それから続けて大体8年くらい、ちょっと切れたりもしていますが、それが途中からアフリカにおける伝統的社会、アフリカ都市社会の比較研究からアフリカにおける都市化の総合比較研究になりました。

て、それからアフリカにおける伝統都市の社会変化の比較調査という所まで、大体1995、6年、私がこの京都文教大学へ来るくらいの所まで続いたわけです。

このアフリカにおける都市社会の比較研究というプロジェクトは一番最初の1986年に12人のメンバーで始まりましたが、私が1996年にこの大学に来る前の年は、36人のメンバーになっていて、もちろん松田素二さん、嶋田義仁さんや上田夫妻（将・富士子）、その他加わってくれてますが、わたしはひとつの考え方を持っていました。それは東アフリカを今までやってきた人は今度西に行ってもらおうや、それから西をやっていた人は東へ来てもらおうやないかという、そういうことを考えまして、そしてそれを続けてやってみて、これはおそらく、行かれた方はそれなりに東と西の比較というようなことがフィールド経験として持てたのではないかと思います。

そして同時にですね、この大学に来るちょっと前からですが、アフリカ現代都市文化研究会というのを作りまして、大体1年に3回ないし4回の共同研究会をやるということで、そのひとつの結果がダルエスサラームにおける総合調査というようなことで、このあたりが、私の最後のあたりの仕事の、皆さんをオーガナイズしての仕事ということになります。

この数年、アフリカの都市研究は大変変わってきています。それは何かというと、私がやっていた頃は、最初の頃ですから、小さな街を全部捉えて、そしてその構造を調べるとか、そういう大風呂敷の調査なんですけれども、この数年の都市調査を見ますと非常に精密な、非常に細かいことで都市を捉えようとしている。例えば、ある人は、ムワンザという町の古着商を調べるとか、それからダルエスサラームにおける、踊りとフットボールチームの関連を調べるとか、屋台の商店を調べるとか、今までのように大組織を捉えるには全体的なことなんか捉えられませんか、やっぱり非常にきちんとした、トピックを押さえた研究がこの10年ほどたくさん出てきています。だから、私などはもう消えちゃいますけれども、おそらくアフリカ都市研究はそういう形で、より発展

し、それから私がずっと長い間一緒にやってきました、松田素二さんとか嶋田義仁さんとか、あるいは和崎春日さんとか、その人たちの教えの中で出てきた有望な人たちが、沢山いると思います。

それから私は1996年の段階ですけれども、（レジュメの）この一番最後のところに、日本におけるアフリカ都市研究、日本人がやっているアフリカ都市研究というのをちょっと地図に落としてみました（資料7）。ここに書かれているように1年以上のフィールドワークをやっている人が35、6人あります。そして、96年から後、2003年まで見れば、おそらくこれよりもまた何十パーセントか増えています。そういう点では、これだけこう沢山の人たちがアフリカの都市研究をやっているっていうのは、おそらく今アメリカでもあんまりいないんじゃないか、しかもその人たちが皆で連携を取って一緒に情報を交換しながらやっているなんていうことは、これはやっぱり日本のひとつの共同研究という、お互いに出てきた成果をいろんな形でこうやって、一緒に考えていくというような、そういう習慣が築かれているということは、日本のアフリカ研究について非常に明るいことではないかと私は思っています。

米山：どうもありがとうございます。私自身はもうリタイアしてしまって、といっても、一昨年はマラウイへ初めて行って楽しんできましたけれども、もう一度行くとすれば何処に行けばいいかな、ということを考えていますが、またフェスへ行きたいなという気もしているんです。

日野：私はスウェト行きたいんですけど、ヨハネスブルグ。

米山：ああなるほど、スウェトはおもしろいですね。たまたまですけれども、放送大学の撮影隊と一緒に、スウェトまで行きました。たまたま運転手さんがあそこの出身だったのでその家まで行ったりしましたし、それから教育大臣にですね、バンギさんという人だけど、その人にインタビューしたんです。そういう機会があったんでスウェトはある意味で非常に面白い所でした。いろんな意

味で大問題を抱えている所だし。では、時間がもう迫ってきているのですが、ちょっとコメントをいただきましょうか。

日野：例えば松田素二さんとか嶋田義仁さんとか、今本当に第一線でアフリカの都市研究をやっている方に少しコメントをつけて頂くということで、素二さんからお願いできますか。じゃ、嶋田君もお願いします。

松田素二：松田といいます。米山先生と日野先生は日本の文化人類学のある意味で発展史を体現されているような方だと思いながら聞いていました。今学生が習う文化人類学というのはそれぞれ下位区分がしっかり確定しています。親族、経済、都市、観光、性などですね。ところが60年代にアフリカで文化人類学を始めた米山先生とか日野先生の研究というのは、そういうある種のマニュアルというのが欠けている訳ですね。米山先生にしても日野先生にしても当時のアフリカ研究者っていうのは、ある意味では偉大なアマチュアっていうか、向こうに行って好奇心の赴くままに何かをやるっていうことで人類学を始めている。で、私なんかもそれに非常に惹かれたタイプです。たとえば普通人類学をきちんと学ぶと、ある民族、ある社会について包括的に調べるっていうのがマニュアルに書いてあるんですね。今日、私たちが教えたり学んだりする人類学のマニュアルもそうです。いったんマニュアルができてしまうと、それにあわせてフィールドワークをしてしまうということがおこります。ところが60年代にフィールドに出た先輩たちは、フィールドの現実自分の頭を合わせたのです。これは今から思えば簡単に言えるんですが、とっても難しくて、画期的なことだったと思うんですね。で、日野先生が60年代に書かれた、例えば衣装の論文もその一例です。今でこそ衣装の人類学ってありそうな感じがしますが、当時そんなものはおそらく人類学としては認められていなかったと思いますね。で、そういうような現実の社会に、現実の文化に自分の頭を合わせて自分の関心に素直にアプローチするっていうことはたいへん重要なこと

だったと思います。それが今お聞きしながら感銘を受けた所です。

日野：それではもう一人、嶋田さんによろしくお願ひします。

嶋田義仁：私は、これまでの日野先生が主催されたいろいろな研究会に参加させていただいて、様々なお教えを受けているのですが、日野先生との初めての出会いはアフリカでした。1979年にはじめてアフリカのカメルーンという国で調査したのですが、その時が始めてでした。カメルーンでは、先ほどこちよとお名前が挙がりましたエルドリッジ・モハammadウさんというカメルーン人の先生にも大変お世話になりました。このエルドリッジ先生というのは、アフリカ人には珍しい独立独歩の研究者で、アフリカの柳田國男と言ってよいような方で、カメルーンの口頭伝承史研究の大家となった方です。アフリカの研究者が研究を続けていくためには、それぞれの国の旧宗主国とのつながりがないと大変難しいのですが、日野先生たちはエルドリッジ先生と出会われ、共同研究をされて、エルドリッジ先生の御著書を多数東京外国語大学のAA研から出版されました。その結果、エルドリッジ先生はアフリカの口頭伝承史研究では三本指に入る大家となられたと言っても過言ではないでしょう。

エルドリッジ先生は後、ナイジェリアのマイドグリ大学のトランス・サハラ研究所とカメルーンのガウンデレ大学で教えられました。ガウンデレというのは、日野先生が『アフリカの小さな町から』（筑摩書房）をお書きになりましたが、その舞台となった町です。実は今日、そのガウンデレ大学の社会人類学の助教授で、日野先生にもエルドリッジ先生にもゆかりのある方が来ておられるので紹介させていただきます。モハマン・ジンギ先生です（拍手）。

今わたしの名古屋大学に來ています。昨年、日野先生やわたしがガウンデレにいきまして、ジンギ先生その他のカメルーン人研究者とシンポジウムをやってきました。ジンギ先生は、ガウンデレについてとんでもなく厚い博士論文を書いておら



資料7 日本人研究者が研究対象としたアフリカ都市

れます。ガウンデレの商人、イスラームの先生、王様など現在のイスラーム・エリートたちの生活や抱える問題を大変詳しく論じています。

そのガウンデレ大学の人類学や歴史学の学生たちには、実は、日野先生がブーム語の百科辞典みたいな辞書を英語で書かれています、これが大変役立っているそうです。これはブーム語の辞書ですが、この地域のリンガ・フランカとなっているフルベ語、さらにカメルーンの公用語となっている英語とフランス語の対応訳もついています。しかも、語彙がアルファベット順というよりは、住居とか衣服というようなテーマ別にわけて整理されていますので、勢い、ブーム社会の民族誌、あるいは民俗語彙体系のような書物になっていてですね、これはブーム社会の研究書として以上に、特定の部族社会をどのように記述するかという民族学的調査のマニュアルとしてもものすごく役立っているのだそうです。

モハマン・ジンギ：My name is Mohamman Djingui and I'm from Cameroon and I'm teaching at an university of Cameroon. So I'm doing social anthropology but at the beginning as I was studying in France by reading text and writing by French, I discovered for them African women have not power. I was surprised because I know the have the power more than my father. So I studied social anthropology to understand why they say that our women have not power? That's beginning of my enthusiasm for social anthropology. And I discovered that there are many misunderstanding. But also for me it was difficult to explain things, because I belong to part of my own society. So the way to understand why my society like this was to collaborate with anthropologist who are coming from other sides. So I took collaborate with anthropologists come from Norway and now I'm collaborate with Prof. Shimada and, in Prof. Shimada, we discovered there is something important to understand Africans. That is multi ethnicity. Because without that concept is not possible to understand African. Prof. Hino has talked about Lamid, the chief of Ngaoundere, his mother is Mbum. His father is Fulany and he married woman from Kanuri people. Then now thelamid of Ngaoundere is the son of that woman from Kanuri. So by this way it's possible for him to maintain the stability in his country. He can use different societies to maintain the stability. And also inside the town, the ethnicity, multi ethnicity is used in a positive way. But also concerning the religion...Can I do something just to say a bit on the board? So my country Cameroon is like this, so here as Prof. Hino said it, here is English, but here is French, but and here we have Muslims, and Christians. Usually, when they talk about problems in Africa, they use this opposition between Muslim and Christian, all opposition between English and French parts. But anyway we discovered in Cameroon inspire the world which space of all the country, the Cameroon with disability. Why disability? Because of multi ethnicity, ethnicity. Here you have Muslim, and Christian also, because of different ethnicity. So inside one town of Lamid, Prof. Shimada has said the Lamid use

the different ethnic-groups who are present in this society, to maintain the stability. I'm from here and then, the ethnicity is used in negative part. To have one between Muslim and Christian is meaning that different group, any group here have to be together in our religion. But they are not together because the enemy of one group is from other groups. They can not make it a group. And the same here English part and French part, we have one part here from Bamenda and from Boya. There is not collaboration between them. They cannot collaborate to have one people from French part. So that is problem of mixture ethnicity in Africa. So thank you.

嶋田：ジンギ先生は、ノルウェイでも、フランスでも研究されています。そして、今おっしゃいましたように、フランス語のいろいろな本を読んだら、アフリカの女性はいつもしいたげられているかのようにしか書いていない。このことに反発されて、アフリカの女性とはんでもないパワーを持っているんだということを、アフリカ家族を研究することをつうじて明らかにしようとされたことが、研究の出発点にあるわけです。そしてもうひとつは、私や日野先生が言ってきたことです。アフリカにたくさんの部族や宗教がある、しかしこれはアフリカにとってけっしてマイナスではないということ、をもあきらかにされています。特に王様なんかはたくさんの部族その他のグループをうまく操作していくことが王国の均衡を維持するために特に必要になるわけで、そういう知恵がアフリカにはあるということです。こうした考え方で、ジンギ先生はアフリカの学生たちの指導にあたっているわけでもあります。

平岡：せっかくの機会ですので質疑応答の時間も考えていたのですが、もうかなり時間が超過してしまいました。で、この後、恵光館という建物の2階におきまして、懇親会をささやかながら開催したいと思います。質問も多々あろうかと思いますが、場所は懇親会に移しまして、質疑応答はインフォーマルな形で行いたいと思います。本日はお忙しい中どうも有り難うございました。もう一

度壇上の二人の先生に温かい拍手をお願いしたいと思います。先生、どうも有り難うございました。

(了)